



〒892-0841
鹿児島市照国町13-42
カトリック鹿児島司教区
電話099 (226) 5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行人 末吉卓也
1部60円年間千共1100円

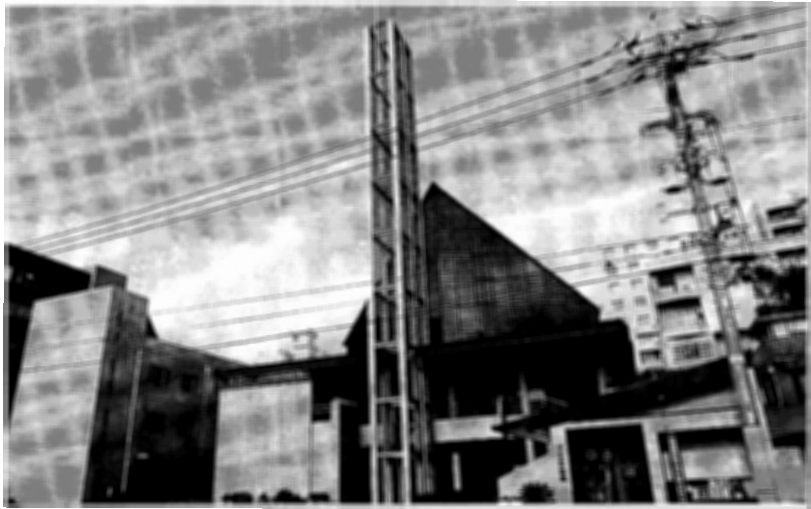
道 標
「聖体の年」
04年10月10日～05年10月29日
【教区目標】
教会の教えを
学び直しましょう

司教区昇格50周年を迎える

小教区の活性化と教区の一体化を祈り 聖体永久礼拝のリレー実施

一九五五年二月二十五日、当時の教皇ピオ十二世は、鹿児島使徒座知牧区を司教区に昇格させて鹿児島教区と名付けた。初代司教は里脇浅次郎司教。今年はその五十周年に当たる。教

皇直轄の知牧区から独立し、司教にゆだねられてから五十周年を迎えたのである。この記念の年に当たり、現在次の行事を行うことが決まっている。
今年二十七日に、カテ



①現カテドラルの全景 聖堂右側に書院、左に本部棟がある

司教区昇格に関する教皇ピオ12世書簡(部分)

日本にある鹿児島使徒座知牧区は、在俗司祭の熱心な働きによってキリスト教信仰の少なからぬ増大があるとのことで、また、その地域が教区の形になりだれか優れた司教の權威に委ねられるならば、少なからぬ進展が見られるであろうと期待されます。

私は喜んで布教聖省の助言を吟味し、日本にある鹿児島使徒座知牧区を司教区に昇格させて鹿児島教区と名付け、これを治めるべく邦人司祭たちに委ねます。彼らはこれまで恐れることなく勤勉に人々の魂の救いのために闘ってきました。それゆえ相応しい賞賛の証が与えられて然るべきであると考えます。

鹿児島教区の区域は、そこから始まった使徒座知牧区の全域を含むだけでなく、一般に奄美大島と呼ばれている島々も含みます。奄美大島はこの書簡によって、人々に琉球と呼ばれている島々の使徒的管轄から外します。新しい鹿児島教区とその統治者たちには他の教区や司教たちに付与されるのを常とするすべての権利と名誉が与えられることになります。しかしまた、世界中で司教の品位を帯びる人々が負うのと同じ重荷と義務を帯びるのは当然です。また鹿児島司教は住居と住所は鹿児島の街中に持つとしても、司教座は街の主たる教会においてください。司教が重要な事柄を決定したり遂行するに当たって熱意と実践によって助ける司祭たちの集いを持つことができるために、参事会を設けること。もしそれが諸事情のために支障があれば、教会法の規定によって教区顧問団を選び、これを用いて下さい。

さらに、司教は委ねられた地域に少なくとも初期教育の神学校を設置するよう配慮してください。

ローマ、ペトロの傍らにて、1955年2月25日教皇登位第16年

ドラルで記念行事開始ミサを行うこと。聖体の年と重なっていることもあり、小教区の活性化と教区の一体化を意向として教区内で聖体永久礼拝のリレーをする

こと。さらに、九月十九日(月)に五十周年記念ミサをし、この中で終身助祭叙階式を行うことである。聖体永久礼拝について
今年二十七日(日)カテドラルでのミサの後、聖体永久礼拝を行う。以後、終身助祭とは生涯、助祭として教会に奉仕する聖

現在決まっている50周年記念行事

- 2月25日(金) 司教区昇格記念日
- 2月27日(日) 記念行事開始ミサ・終身助祭候補者認定式(糸永司教司式)
午前9時 カテドラル
聖体永久礼拝リレー始まる
- 9月19日(月) 司教区昇格50周年記念ミサ・終身助祭叙階式 カテドラル

聖体永久礼拝リレー実施日

教会名	期日	教会名	期日
1 ザビエル	2月27日	19 瀬留	7月3日
2 出水	3月6日	20 大笠利	7月10日
3 阿久根	3月13日	21 種子島	7月17日
4 入来	3月20日	22 鴨池	7月24日
5 川内	3月27日	23 鹿屋	7月31日
6 吉野	4月3日	24 垂水	8月7日
7 玉里	4月10日	25 始良	8月14日
8 加世田	4月17日	26 志布志	8月21日
9 紫原	4月24日	27 国分	8月28日
10 谷山	5月1日	28 溝辺	9月4日
11 指宿	5月8日	29 大口	9月11日
12 大熊	5月15日	修道会名	期日
13 小宿	5月22日	30	9月11日
14 名瀬	5月29日	31	9月18日
15 古田町	6月5日	32	9月25日
16 古仁屋	6月12日	33	10月2日
17 母間	6月19日	34	10月9日
18 和泊	6月26日	35	10月16日

※教区内の全修道会分担任
詳細は別途連絡

「世界平和の日」 メッセージ

教皇ヨハネ・パウロ二世は、二〇〇五年「世界平和の日(二月一日)」メッセージを発表した。この中

で、暴力によって引き起こされる悪を強く非難し、平和とは、悪が善によって打ち負かされるときにのみもたらされる、長くて、辛抱強い闘いの成果であると述べている。
同メッセージの要約を二面に紹介する。



司教祝聖式(1955年5月3日)の後、鹿児島の司祭、信者とともに記念撮影。最前列左から5人目が里脇司教(長崎・中町教会で)

佐藤敬一前新潟司教が帰天

フランススコ佐藤敬一前新潟教区司教が、一月二日(日)午前九時四十四分、心不全のため静養先の札幌市の病院で帰天した。七十六歳だった。

佐藤敬一司教は一九二八年四月十一日の北海道上川郡生まれ。十八歳で受洗し、北海道大学工学部卒業後、一九五五年にフランススコ修道会へ。司祭叙階は一九六二年。一九七七年にはフランススコ会日本管区初代管区長に任命され、一九八五年に司教に叙階、その後、十九年間、新潟司教を務めた。
その佐藤司教の葬儀・告別式は一月五日(水)新潟カテドラルでしめやかに執り行われた。

①二〇〇五年「世界平和の日」のテーマとして、わたしは、聖パウロのローマの信徒に宛てた手紙のこゝとば「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」(ローマ十二・二一)を選びました。この偉大な使徒は、平和とは、悪が善によって打ち負かされるときにのみもたらされる、長くて、辛抱強い闘いの成果であるという根本的真理を明らかにしています。

平和は、善によって促進される善です。しかし、これは、善によって鼓舞された決断と行動によって維持され育まれる必要があります。悪に對して悪をもって報いるという悪循環から抜け出す唯一の道は、「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」というこの使徒のことばなのです。

悪・善・愛
②悪はこの世界に働いている何か非人格的な決定論的な力ではありません。悪は人間の自由がもたらした結果です。この自由は、常に悪のドラマの中心に存在しています。悪は、いつも名前と顔をもっています。それは、悪を自由に選びとる男女の名前と顔です。人類の歴史の初めに、アダムとエバは、神に向かつて反抗し、アベルは兄弟カインによって殺された、聖書は教えています(創世記三・四)。これらが、最初の誤った選択でした。そしてこの誤りは、世紀を通じて数え切れない人びとによって続けられてき

ました。
悪は、その最も深いレベルにおいて「愛の要求の悲しむべき拒絶」(注)です。これに反して、倫理的善は、愛から生まれ、愛として自らを示し、愛に向かうものです。キリスト者の愛の内的な論理は、敵をも愛するように導きます。「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ」(ローマ十二・二十)。

やまずにおれません。
平和という善に至るために必要なのは、良心を鍛え、兄弟愛に基づいたヒューマニズムを高く掲げることによって、若者たちを善に向けて教育することです。これこそが一人ひとりの尊厳と自由を尊重する社会的、経済的、政治的秩序の基礎となるものなのです。

普遍的徳律の根本原理
③十年前、国連総会の席で、「普遍的徳律の根本原理」について言及しました。

二〇〇五年「世界平和の日」教皇メッセージ 悪に負けることなく 善をもって悪に勝ちなさい



平和の善と共通善
⑤善をもって悪に勝つことによって平和を育てるには、共通善と、それが社会や政治とどのように関わっているかを注意深く考察する必要があります。個別

④この人類に共通な道徳原理は、一人ひとりの、そして諸国民の生活が尊重され、向上することを保証する上で、常により大いなる献身と責任を要求します。このような見地に立つて、社会的、政治的本性のもつ諸悪、とくに暴力によって引き起こされる悪は、強く非難されるべきです。わたしが、直ちに思い出すのは、愛すべきアフリカ大陸です。それから、イエスの生きた地であるパレスチナです。また、テロリストの暴力という現象は世界中を恐怖と苦悩の未来に導いているかのようです。そして、イラクの惨劇を深く悔

人は、その社会性を考慮することなしに完成を見出すことができません。一人ひとりは、何らかの仕方での共通善のために働くよう呼びかけられています。この責務はとくにあらゆるレベルでの政治的指導者にあります。
したがって、共通善は、基本的な人権を尊重することと、その完全な促進を求めます。同様に、全世界的な視点で、諸国の権利を尊重し、促進することを求めます。共通善は超越的次元をもっています。なぜなら、神が全被造物の究極の目的だからです。人類の真の共通善を達成するために、イ

エスが十分な光を投げかけてくださいました。
平和という善と
世界資源の利用
⑥平和という善は、人類の発展と緊密につながっているのです。地球の資源を利用するにあたっての倫理的な条件が、常に考慮されなければなりません。

⑦平和という善はまた、今日、科学や技術の進歩に由来する新しい財産と密接にかかわっています。財産の全世界的な利用は、多くの人びとを追い込んでいく障壁と独占が取り除かれなければなりません。平和という善は、国際

な手段は、公正に調整された通商関係の国際的な枠組みの中で、理にかなった状況のもとに与えられる公的、私的な海外の資本援助を通して必要な資源をそれらの国々に提供することです。倫理的なしかたでの経済的富の流動化が早急に必要です。これは、貧しい国の利益になるよう、すでに結ばれた協定を尊重するものであり、同時にまた、ある国々にとつてあまりにも重荷であることがわかった協定を進んで見直そうとするものです。

⑩愛徳の新しい創造性が緊急に必要です。この必要は、わたしたちが、アフリカにおける多くの困難な問題を考えるとき、はつきりとみられます。アフリカの人々が、自らの手で、自らの未来、自らの文化的、国家的、社会的、経済的發展を築いて行きますように。幾度も繰り返された公的開発援助の約束の不履行、今なお解決されないアフリカ諸国の抱える重い債務の問題、国際的通商関係において、これらアフリカの国々に特別な考慮を払わなかったことが、平和への重大な障害を意味しており、それらは、早急に着手され解決される必要があります。今日、今までもまた、世界に平和をもたらすための決定的条件とは、富める国と貧しい国の間の相互依存を認めることです。

の悲惨な状況に直面して、一人ひとりが悪に打ち勝ち、善に到達できるのは、ただ神によってのみであることをキリスト者は謙虚な信頼をもって認めます。
⑫善によって悪に勝つための闘いは、愛という武器によってのみ有利に戦われます。社会的、政治的分野でも同じです。キリスト者は、自らの生活によって、愛だけが人間と社会の完成をもたらすし、また歴史の辿る道を善と平和に導くことのできる唯一の力であることを示す義務があります。
聖体には捧げられたこの年の間、教会の息子や娘たちが、この秘跡のうちに、救い主イエスとの交わり、そして彼のうちにありすすべての人との交わりの源泉を見出しますように。キリストは、その死と復活によって感謝の祭儀の中に秘跡的に現存され、わたしたちを悪から救い、善を行うことが出来るようにしてくださりました。ひとつのパンとひとつの杯を分け合うことによつて「神の家族」であり、正義と自由、そして平和という価値に基づいた世界を築くために、自分なりの効果的な貢献ができることが分かるようになるのです。

悪の偏在とキリスト教的希望
⑪世界に存在する多くの

バチカンにて、
○四年十二月八日
ヨハネ・パウロ二世
注 「二つの愛が、二つの国を作った。神を軽んじる自己愛がこの世の国を興し、自己を軽んじる神への愛が天の国を興した」(アウグスチヌス「神の国」十四・二八)

2月

犠牲と祈り、回心の四旬節を過さ
しましよう。

【十字架の使徒会祈りの意向】 司祭の召命

- 1日(火) 大勝教会献堂記念日(一九六二年)
- 2日(水) 主の奉獻
- 4日(金) ボツフィ神父命日(一九八八年)
- 5日(土) 日本二十六聖人殉教者
- 9日(水) 灰の水曜日(大斎・小斎) 四旬節愛の献金
- 11日(金) 世界病者の日

【世界病者の日】

教皇ヨハネ・パウロ二世は、一九八四年二月十一日(ルルドの聖母の記念日)に使徒的書簡「サルヴィフィチ・ドローリス」苦しみの中のキリスト教的意味」を発表し、翌年二月十一日には教皇庁医療使徒職評議會を開設しました。さらに一九九三年からはこの日を「世界病者の日」と定め、毎年メッセージを発表しています。

- 13日(日) 四旬節第一主日
ハンマ神父霊名(ヨルダン)
- 14日(月) 教区司祭会・教区本部・16時
- 20日(日) 四旬節第二主日
- 22日(火) 聖ペトロの使徒座
- 25日(金) 司教区昇格記念日
- 27日(日) 四旬節第三主日

▼終身助祭候補者認定式・カテドラル・9時
▼聖体永久礼拝リレー始まる
▼東條一浩神父命日(二〇〇一年)

3月

- 6日(日) 四旬節第四主日
- 13日(日) 四旬節第五主日

座談会

来たる二月二十五日(金)は鹿児島司教区が司教区に昇格した記念日。そして今年には昇格から五十年という節目を迎える。
教皇の直轄区であった鹿児島が、教区司教の手に委ねられるようになるという出来事を当時の信者たちがどのように受け止めたのか。教区報では当時を知る皆さんと一緒に、昇格の頃を振り返りながら教区がどのように成長していったのかを思い出してみよう。

鹿児島司教区昇格50周年記念 教区成長の過程を語る

新春

司教区昇格から今日までの五十年を私なりに四つに区切って振り返ってみよう。

私が振り返る鹿児島島の五十年

ザビエル教会主任司教 永山 幸弘

まずは昇格当時ですね。昇格直前の出来事としてはザビエル渡来四百年祭、奄美諸島日本復帰、コンベン



永山幸弘神父

ツアル会来島、レデンプトール会来島があります。当時の教会は、教会の戦後処理・建て直しに尽力し、新たな歩みを始めたと言えます。この時、長崎で鹿児島司教の叙階式があり、鹿児島からも大勢の皆さんが参列されたわけです。信者さんたちがこの司教区昇格と

司教区への昇格の思い

当時の様子と司教叙階式

永山 鹿児島教区が司教区に昇格して五十年を迎えます。今日は皆さんにこの若くて小さな教区がどのように成長したか、その歩みを辿り、またそうすることでこれから教区の未来を展望できたらと願っています。

司教区への昇格は一九五五年、昭和三十年でした。その頃の鹿児島は、ザビエル渡来四百年祭、奄美群島の日本復帰、コンベンツアル会の来島、レデンプトール会の来島という出来事があつた頃です。そんな頃に知牧区から司教区へと昇格します。鹿児島の信者さんは、この出来事をどのような

いう出来事をどう受け止めたか興味深いですね。

次に司教区初期、司教区としてスタートした十年間です。この頃の世界の教会は第二バチカン公会議開催によって変化し始めま

す。鹿児島では教区としてまとまりを見せる時代とも言えます。ここに初代司教の転任が重なります。

そして一九七〇年代、若い司教を迎えて活発になっていく中期です。教会と宣教の基盤が整備されて行く時代に入ります。鹿児島市内に六小教区が配置され

か。戦後の大島はカプチン会、コンベンツアル会が来島し、また戦争中の迫害の衰退から立ち上がる頃だと思いが、教会の盛り上がりはいかがだったでしょう。

久保 戦争中に教会を離れていった人々も徐々に教会に戻ってきていたと思います。司教区になるということの重大さとかは理解していませんでしたが、青年たちが元気だったように思います。

永山 当時の本土の信者は千人程度だったようですね。これに奄美の三千人余りの信者が加わって、昇格当時は四千人あまりになっていた。こういうことを考えると昇格当時の大島には相当の機運と活気がみなぎっていたと思うのですがいかがでしょう。

「鹿児島島のキリシタン」が出版されます。そして何より教区財政正常化計画が打ち出されたことは大きかったと思います。

八〇年代に入ると信徒大会が開催され、信者倍増十カ年計画が打ち出されました。教皇の来日もありまして、日本司教団が日本の教会の優先課題を打ち出し、NICEも開かれます。まさに動の時代だったと言えるでしょう。

最後に九〇年代から現在までは司教区後期。宣教再開百周年、ザビエル渡来四五〇年祭とあり、特に宣教百周年を機に作成された「教区ビジョン」の実現に向けて、歩を進めていくということですね。

田辺 私が初めて奄美大島に行ったのは、奄美が復帰してすぐでした。戦時中、大島の信者たちは教会を接収されないように財団法人奄美天主教会を組織していました。しかし本土では、奄美復帰前に宗教法人法ができていたんです。そして奄美の復帰でしよう。復帰すると今度は教会

は宗教法人法の管理下に置かれるという具合です。私はその登記の役を担ったのです。期日も迫っていました。金もなくて司法書士にも頼めない状況でしたから、大変苦労しました。

その頃の奄美はと言いますと、活気がありました。コンベンツアル会が来ていましたが、彼らの一か月の経費は教区の一年分以上という具合でした。奄美の教会にはジープが何台もあるし、大工もいるし、伝道師もたくさんいるんですね。

永山 当時はまだ戦後処理という大きな仕事があったんですね。長崎での里脇司教の叙階式には七田神父が巡礼団を組織しましたが、その叙階式はいかがでしたか。

桃菌 私の日記によりますと五月一日に六十人余りで夜行に乗って出かけています。二日の早朝、鳥栖教会でミサにあずかり、肥前山口で乗り換えて長崎へ行きました。聖母の騎士や大浦天主堂を巡り、宿泊は純心でした。五月三日の叙階式の会場、中町教会はまさに立錫の余地もないほど

でしたが、鹿児島島の信者のためにはよい席が準備されていた。私はその荘厳さに感動し、式典の調和にも驚いています。鹿児島島の信者たちは記念撮影にも呼ばれました。あの頃は、司祭や司教に距離を感じていましたからとても嬉しいことでした。七田神父様からは「司教区に昇格したし、これからはしつかりしなくちゃ」と言われました。しかし昇格については、よく理解していなかったようです。日記には「やっと大人になった」と記していますので、その程度の理解だったと思います。

永山 知牧区であると教皇直轄であり、司教区になると自治権を持ち、司教がその名において管轄するという、そういう昇格の意味は明確にはなっていないですね。

桃菌 明確にはなっていないんですけど繰り返して「しつかりせよ」と言われているうちに意識されていくようになったと思います。それがレジオの活動や洗礼者数に反映してきたのだと思います。

永山 橘木さんは当時は信者ではなかったと思いますが、当時の様子や里脇司教のことで何か思い出がありますか。

橘木 一九五五年が里脇司教の叙階でした。私はその二年後に受洗しました。その頃、純心の学生でしたが、司教様に指輪を見せて頂いたのを記憶しています。公教要理も担当して下さっていました。

野田 私は里脇司教様がよく私の家に、父に会いに来られていたのを思い出します。薬師町の土地のことなど、いろいろな法律上の手続き問題や鹿児島島の事情を知るためだったようです。

座談会出席者

司会：永山幸弘神父(ザビエル教会主任)

田辺 徹神父(78歳)

1951年3月司祭叙階。叙階以来、戦争で荒廃した教会の建て直しに尽力するとともに、県内各教会、幼稚園で働いてきた。2003年引退。



野田正喜さん(85歳)

ザビエル教会所属。女性信徒の会の前身「鹿児島カトリック婦人連合会」会長



桃菌淳一郎さん(77歳)

鴨池教会所属。鴨池教会カテキスタ



久保俊弘さん(73歳)

谷山教会所属。名瀬市出身、信仰養成委員



橘木嘉奈子さん(62歳)

吉野教会所属。前カトリック女性信徒の会会長。信仰養成委員



歩き出した鹿児島司教区

司教区初期を振り返る

この動きがヨーロッパではあったようですが、当時はカトリック新聞といえども伝えてない部分でしたから新鮮でした。里脇司教は特急を利用して出張になど動かれていて、青年たちが十人ほどで西駅まで迎えに行くものでした。そんな折りに世界の教会の様々な動きを教えて下さっていました。

永山 これまでのお話から、里脇司教時代というのは公会議で新しい機運は起こっていますが、教区的には法律のもとに体裁を整えていくことにウエイトを置いていた時代のようなのです。その頃の鹿児島市はザビエル教会が中心だったと思いますが、どんな様子でしたか。

永山 コミュニケーションが取れていたということですね。一九六二年に教区報が創刊されるのですが、これは司教様が信者の信仰養成とコミュニケーションのためだったと思います。その点ではいかがでしたか。

永山 今でもそうですね。修道会の助けなしには教区の今はなかったのかもしれないですね。ところで里脇司教時代の集大成といえ「信徒大会」かと思うのですが、いかがですか。

永山 養成といえ、司教様は神学講座の講師を務めておられました。信徒大会に燃えたのですが、その後、少し疲れたという感じがします。

永山 お話を伺うと、その頃、少いながらも、第二バチカン公会議で提唱された信徒のアイデンティティに対する目覚めが起って来たということですね。

田辺 昭和三十一年、三年頃の奄美は、とにかく活気があったと思います。名瀬の社会党の議員団が「カトリックの青年団と話がしたい」と言ってくるほどでした。それはカトリックの青年たちが非常に多く、まわっていたからですね。青年たちがよく活動していて、街頭募金や社会福祉協議会の仕事や、あらゆることに精を出していたからですね。スポーツなどもそのひとつですね。

永山 教会だけでなく、社会のために活動していたということですね。市民権があったということですね。

春会

鹿児島司教区昇格50周年記念

新座談

教区成長の過程を語る

野田 ザビエルを中心によくまとまっていたと思いますよ。運動会など市内の教会対抗戦なんてこともありましたよ。

野田 司教様はご自分が第二バチカン公会議に出られていたから尚一層、伝えたいという思いが強かったのだと思います。

田辺 そうです。ですから要理にしても一人、二人のためにはできないほどで、まとめていました。募集には「南海日々新聞」に広告を出して呼びかけるほどでした。だいたい三十人程度は集まりました。洗礼数は多かったですね。社会的に認められていたし、

永山 奄美の勢いは素晴らしかったですね。でも対照的に本土地区の六〇年代の信者数の伸びは下降線

桃菌 青年たちが元気だったと思います。ザビエル祭一つを取りましても、天文館を行ったり、城山に登ったりするなど、宣教に頑張りました。それには司教様も参加して行列して下さり、みんなが燃え上がっていたと思います。

田辺 田辺 司教様はよく勉強していましたね。「子供の公教要理」の本も作られました。また郡元の教区長館に丹下先生、久木山君など来て哲学の勉強などしていましたね。そして桃菌さんがおっしゃるようなあちこちで公会議の話をしていましたね。

永山 他に当時の鹿児島の様子をお聞かせ願えますか。

田辺 一九五八年でしかザベリオ宣教会が大隅

50年の主な出来事

司教区昇格当時

- ①司教区昇格と初代司教任命 (1955.2.25)
- ②昇格時の信徒数3,933

司教区初期 (1955~69)

- ①里脇司教が長崎大司教に赴任 (1969)
- ②ザベリオ宣教会が大隅地区へ (1958)
- ③第2バチカン公会議 (1962~65)
- ④奄美大島、徳之島地区洗礼増加
- ⑤1969年の信徒数8,784

司教区中期 (1970~89)

- ①第2代司教永水司教就任式 (1970.1.18)
- ②1970年代
 - ・鹿児島市内は吉野、玉里両小教区を加え6小教区
 - ・第1回信徒神学会 (1970)
 - ・「鹿児島のキリシタン」出版 (1974)
 - ・ザビエル会館開設 (1974)
 - ・教区財政正常化計画 (1977)
 - ・教区目標設置 (1973)
 - ・教区創立50周年 ※知教区となつてから

③1980年代

- ・教皇来日 (1981)
- ・巡制度設置と小教区司牧評議会教区内一律実施
- ・「カトリックの信仰」出版
- ・1,400人が会し教区信徒大会 (1984)
- ・日本司教団が日本教会の優先課題発表 (1984)
- ・信者増進10年計画 (1985)
- ・南九州小神学院開設 (1986)
- ・教区本部移転 (1987)
- ・ザビエル幼稚園開設 (1987)
- ・第1回福音宣教推進全国会議 (1987)

司教区後期 (1990~)

- ①宣教再開100周年 (1991~92) ※教区ビジョン作成
- ②第2回福音宣教推進全国会議 (1993)
- ③ザビエル渡来450年祭及びカテドラル落成 (1999)
- ④2000年大型年
- ⑤小教区の理解と刷新
- ⑥教区本部移転 (2003)
- ⑦聖体の年 (2004~05)
- ⑧教区評議会開催 (2004.11)

伝道師も頑張っていました。私も青年たちに「運動会でも、どんな時でもカトリックの名を売るよう」伝えました。

桃菌 一つには第二バチカン公会議の不消化があったと思います。新しい感覚が入り込むときに、わがままに解釈してしまつて「宣べ伝え」は時代遅れだと決めつけ、それを打ち消す作業をしなかったような気がします。社会が高度成長に向いて動き、信徒も翻弄されてきたと思います。教会の祝日も日曜に定められましたが、本当のその意味を理解せずに安易な方に解釈してしまつたことなどですね。大崎、小崎や四旬節中の日曜日の労働についてもそうですね。

加えてコンベンツアル会の社会福祉への働きが大きかったと思います。アメリカから奄美のために物資を運んでくれましたからね。当時、奄美で広がっていた他の宗教とは違って、市民のために働いてくれるという印象を植えつけてくれたですね。とにかくそんなことで、奄美では信者が増えていきました。洗礼はまず女性からでしたが、その後子供、ご主人と受洗されて増えていきましたね。

永山 今日皆さんに知教区から司教区へ昇格する頃、そして里脇司教時代を振り返って頂きました。信者数の伸びも当時を境に下降線を辿り、高度成長の波の高まりとは裏腹に教会は静かになっていきました。しかし皆さんが活躍された当時を振り返ること、特に奄美の青年たちが市民権を獲得していたことなどうかがうと何か光が見えるような感じがしました。今後の教会の在り方のヒントにしたいと思えます。長い時間、ありがとうございました。

久保 JOCもよく働いたと思いますよ。名瀬が大火事に遭ったときも、仮設住宅から追い出される人たちのために立ち上がりましたからね。

永山 奄美の勢いは素晴らしかったですね。でも対照的に本土地区の六〇年代の信者数の伸びは下降線

田辺 そうですね。ですから要理にしても一人、二人のためにはできないほどで、まとめていました。募集には「南海日々新聞」に広告を出して呼びかけるほどでした。だいたい三十人程度は集まりました。洗礼数は多かったですね。社会的に認められていたし、

永山 奄美の勢いは素晴らしかったですね。でも対照的に本土地区の六〇年代の信者数の伸びは下降線

司教区昇格
50周年記念

教区の母なるカテドラル
ザビエル教会のこの五十年

ザビエル教会は今年で創立百十五周年を迎える。一八八九年島田喜蔵神父が鹿児島市の旅館の一室を借りて宣教を始め、その翌年現在地を拠点にして教会が始まった。以下長い歴史は割愛して、司教区創立以来の主なものを取り上げてザビエル教会を紹介したい。

司教区昇格

ザビエル教会は一九五五年の司教区昇格によって司教座教会(カテドラル)となった。司教座教会は教区民の教会、教区全小教区の母なる教会、そして教区司教が教区民と社会に対して司牧宣教の任務を果たす場である。しかしザビエル教会は同時に周辺地域の信者の司牧と宣教を行う小教区教会でもある。

現司教座聖堂の
献堂と現状

築五十年を経過して老朽化したことを機に、現在に適應したカテドラルとしての機能を効果的に遂行するため、またザビエル渡来四百五十年の記念事業の一つとして、難産の末であったが、一九九九年九月十五日現聖堂が献堂された。

これに至るため、ザビエル教会所属の信者は困難の中でも小教区意識を教区意識に変革しようと努め、

建設資金を拠出し、また多様な働きかけによって多くの資金を調達した。このプロセスの中で、多くの方の信仰と教会への愛を体験し

あるいは出会い、また感動的な物語も生まれた。大きく、強い多くの不協和音が起こったが、本物の教区になるための一つの過程だったと言える。

教区本部とともに

教区本部は教区司教の司牧宣教の任務を補佐する執行機関である。このため本部職員がいるが、本質的に教区民によって支えられている。ザビエル教会の信者は他教会の協力を得ながらも、中心的な役割を果たしているといってもよい。

ザビエル教会は本部とともに歩む。他方この教会は小

である。どうみてもいまもって発展途上にあるが、現在訪問者に対応するために昼夜にわたってボランティアの案内係を置いたり、多数の結婚式を運営するための組織を作ったり、また可能な種々の講演会、コンサートを受け、あるいは独自で開催している。市民向けの講座、教区内の種々の学習会、研修会、各種団体の集会、教区レベルのミサ、など以前とは比べものにならないほどこの建物を使用されている。

ザビエル書院

この書院には三つの役割があるように思える。聖堂への案内、書籍、聖具、ご絵、ご像を通しての養成と宣教の場、そして教会と市民との前座的コミュニケーションの場である。未洗者にとって聖堂に入った

司教区昇格
50周年記念
司教区昇格
50周年記念
司教区昇格
50周年記念

田代竜之君

現在、鹿児島教区では司教の高齢化とともに司教召命の減少が切実な問題となっているが、今年、待望の新しい教区神学生が誕生する見込みとなった。

大笠利小教区(主任司教・浜田盛茂神父) 赤木名教会に所属するヨセフ田代竜之君が主任神父と召命担当司教(木村敏彦神父)の推薦を得て糸永司教に教区神学生として認められた。



田代竜之君

生たちと生活し、そこから南山中学に通うこととなる。

四人兄弟の末っ子で、愛情豊かに育てられた田代君は、ユーモアいっぱい少年で、よく喋り、周りを笑わせ楽しませる明るい少年で、文章を書くことも趣味だという。

合格の知らせを聞いた田代君は「試験は自信なかったけど合格してうれし

神学校に息子を送り出すこととなった母・征子さんは「この子には小さいときから『あなたは神様からのプレゼントだから神様のところに行きなさい』と言っていた。ヨセフ様にささげていたから心配はしていない。楽しみです」と朗らかに語った。

主任司教の浜田神父は「以前はちゃんちゃったけど最近落ち着いてきてとてもいい子です。小さいときから侍者をよくしてくれ

現在鹿児島教区の神学生は他に長崎コレジオに藤畑広仁君(浦上教会所属)がいる。藤畑君と田代君が自分の召命に応え、励まし合いながらよりよくその道を歩んでいけるように教区全体で祈りたい。

WYDに教区からも参加希望者
今後参加呼びかけとご支援を

八月にドイツのケルンで開催されるワールドユースデー(WYD)に教区から現在三人の青年が参加を希望している。志布志教会(主任司教 郡山健次郎神父) から二人、川内教会(主任司教 J・ハンマ神父) から一人である。

一月九日に長崎で開催されたWYDについての説明会には、鹿児島教区からも三人の青年が参加して大会説明を受け、その意義等について分かち合いが行われた。参加した青年からは「WYDについていろいろ考えることが出来た。参加

してみたくなった」という声が上がった。今回のWYD日本巡礼団の内容は巡礼という意味で大変充実している。八月九日に日本を出発し、まずドイツの隣の小さな国ルクセンブルグに行き、そこでフィアンデンの森の聖母聖堂への徒歩巡礼やホームステイが行われ、その小教区で四日間を過ごす。十六日からはWYD本大会が始まるためドイツに移り、ケルン教区内のデュッセルドルフで宿泊(ホームステイか教会関係施設利用)する。そこで、同行の日本の司教

たちによるカテケジス(要理の勉強)や赦しの秘跡、ユースフェスティバル、十字架の道行が行われる。さらにメインとなる二十一日に行われる教皇ミサに参加するために数十キロの道を祈りとともに徒歩巡礼し、教皇と共に祈り、そこで野宿しミサに備えることとなる。本大会が終わったあとも、日本巡礼団の振り返りの日を設けて祈りと分かち合いで一日を過ごす。その後、東京教区と姉妹教区となっているケルン教区との交流の日もあり、二十四日に日本に帰ってくる。参加申込やお問合せは教区本部・久保直基まで。申込締切は二月二十五日



①勢揃いした主の降誕祭での受洗者たち (1955年12月25日)



②糸永司教と受洗者たち (1971年6月13日)

成人して思う

教区神学生 蕪畑広仁

一月十日、成人の日を迎え、教区内でも多くの若者が大人の仲間入りを果たした。現在長崎コレジオに在学中の鹿兒島教区神学生・蕪畑広仁君も今年成人を迎えた一人。蕪畑君に成人を迎えてこれからの意気込みを聞いてみた。

今年、私は成人式を迎えました。まだまだ大人としての実感が湧かないものの、これから大人としての自覚と責任を持つとともに、自分自身の召命について、しっかりと見つめ、神様のお望みに沿うことができるように歩んで行きたいと思っています。



今年には私にとって、とても良い経験ができた年だと思っています。二月に、コレジオのタイへのボランティア活動に行くことになったからです。このボランティアは、コレジオで毎年行われています。ボランティアでは、タイ山岳地帯の村への教会建設や、村人との交流などしたりします。このボランティアでの奉仕はもちろんのこと、逆に多くのものを学ぶことができると思っています。そしてまた、夏にドイツで行われるワールドユースデーにも参加したいと思っています。これら多くの体験を通して、良い経験をし、自分の成長の糧としていきたいと思っています。

去年十二月二十四日深夜十一時のザビエル教会でのミサで、毎年このミサは、青年が主体となつて若者が集まりやすい雰囲気を作ろうとしています。ミサの後、私が祭壇の片付けをしていると、祭壇脇の馬小屋で祈りをする人や写真を撮っている人達の少し後ろのほうに、一人で立っている若い女性が目に留まりました。彼女は祭壇の横に掲げてある木製の十字架のイエス様をじつと見つめていました。しばらくして彼女は私に「この十字架を触っていい

声

たの？」と聞くと、彼女はまた目いっぱい涙を浮かべていました。「私、信者なのに実家を離れてからは全然ミサに来ていませんでした。でもクリスマスにふと思い立ってミサにあずろうと思いい、アルバイトが終わってから来れ

てから二年が経とうとしています。コレジオでは、皆別々の大学へ通いながらも、お互いに司祭召命という共通の目的を持ちながら、家族という形で生活しています。自分の召命の事などについて悩んだりしま

す。その中で、多くの方々の霊的・物的支えがありました。皆さんの支えが励みとなって、頑張ることができ、とても感謝しています。これからもどうぞお祈りよろしくお願ひします。そしてまた、これから

の鹿兒島教区の司祭召命のために、お祈りよろしくお願ひします。後輩がたさんでいることを楽しみにしています。

ザビエルさまの散歩道 インターネットの中のザビエル様



昨年のクリスマス前後から急に寒さが増して、正月前後は鹿兒島県内でも雪やあられが降ったとか。今は温暖化が進み、昔よりは暖かくなったことを考えると、貧しい身なりで鹿兒島に来たザビエル様の苦労が思い浮かびます。「私たちはホントに恵まれているなあ」と暖かい部屋の中で考えていました。

恵まれた現代の便利な物の一つパソコンのインターネットで「フランシスコ・ザビエル」を検索してみました。すると、出てくる出てくる！画像だけで四百七十件、文書も合わせると二万五千五百件も出てきました。とても全部見ることはできませんが、気になったものだけ見ていくとザビエル

ゆかりの地、スペインやマカオ、ゴア、山口、大分など、もちろん鹿兒島も！ザビエル像や教会の紹介が多数ありました。中には個人の旅の写真や、ぜんぜん関係ないもの、面白おかしいもの、などなど。よくこんなにあるものだと一種の感動すら覚えました。

多くの困難を乗り越えて、船で何ヶ月もかけて日本に来たザビエル様のことが、現代ではインターネットを通して世界中で紹介されていますし、自宅にいてその足跡をたどることも出来ます。皆さんも一度見てみてはいかがですか？

文芸

短歌 (思川短歌会作品)

古仁屋 豊島忠司
この街にお告げの鐘が鳴る正午自転車
漕ぎて折りつつ行く

(評) 素朴な四・五句が作者を表白した

出水 遠竹睦郎

新玉の年改まりし春の夜はマリア・
マグダレーナの本等読みゆく

阿久根 中津濱フサエ

人生の八十路の坂をこえにける老い
て深まる夫婦の絆

名瀬 林 明子

夫の弾く三味の音色いとしくて唄い
続けてわが子守り歌

鹿兒島 春山マリ子

窓の月昔を想い懐かしむ眠りゆくま
ましばし遊びて

鹿兒島 前田儀子

ひと筋のあをき悲しみひく眠り覚め
て妹の句集ひもとく

大口 森 博伸

うたを書く三十一文字に納め得ぬ想い
を整え一首成たり

鹿兒島 田平新太郎

白梅の乱るる花を追ひかけて里に咲
きつぐ紅梅の華

俳句 (思川俳句会作品)

荒磯を飛びそこねたる初雀
(評) 飛びそこねたるは作者の発見。

名瀬 松畑義弘

「初雀」がよい。

出水 遠竹睦郎

薩摩鶏闘鶏飼はむと春立ちぬ

鹿兒島 徳永ノブ子

主に歩み委ねて老の去年今年

鹿兒島 春山マリ子

一つ又今年も齢得る重み
かぐはしく咲きてや野の雪中花

鹿兒島 龍門司真人

<KABAYAN SEKSIYON> "ANG SAKRAMENTO NG PAGKASAL"

Ang pang-pitong sakramento na pag-uusapan natin ay ang tungkol sa sakramento ng pagkasal. Tatalakayin ko la ng ang importanteng parte ng sakramentong ito. Sinabi ni San Pablo: "Lalaki, mahalin ninyo ang inyong asawa, gaya ni Kristo na nagmamahal sa simbahan... dakila nga ang lihim na katotohanang ito, ang tinutukoy ko, si Kristo at ang Simbahan. Ang tipan ng kasal ng lalaki at babae ay itinakda ng bawat isa, na magkaisang-dibdib sa buongbuhay sa ikabubuti ng mag-asawa, ang paggawa ng bagongbuhay at pagtuturo sa mga supling(anak). Ang tipan na ito ay itinaas ni Kristo sa dangal ng sakramento ng dalawang taong parehong binyang. Ano ang kahalagahan nito sa buhay ng lalaki at babae? Ang tawag ng pagpapakasal ay nakasulat na sa natura ng lalaki at babae, habang sila ay galing sa kamay ng Maylika. Nilikha ng Diyos ang lalaki at babae sa pamamagitan ng pag-ibig, at sila rin ay tinatawag na mag-mahal, na ito ang pinakapondasiyon at tawag ng bawat nilikha. Ginawa ng Diyos ang tao na kawangis niya dahil siya mismo ang pag-ibig. Ang pagmamahalan ng lalaki at babae ay nagpapakita ng walang wagas ng pag-ibig ng Diyos sa tao. At ito'y magandang-maganda sa paningin ng Maylika. Ang Diyos mismo ang nagpala sa kanila: "magiging mabunga kayo at magparami, punuin ninyo ang lupa at kayo ang makapangyari rito." Sinasabi sa Banal na Kasulatan na ang lalaki at babae ay ginawa para sa isa't isa; hindi mabuti na mag-isa ang lalaki; ang babae na laman ng kanyang laman at kanyang magiging katulong. Dahil di to, iwan ng lalaki ang kanyang ama at ina, at pipisan sa kanyang asawang babae, at sila'y magiging isang laman." Dahil dito, itinaturo ng Simbahang Katoliko na ang pinag-isang dibdib ng Diyos ay hindi pwedeng paghiwalayin ng tao, dahil sa simula pa lang sila'y magkaisa na hindi dalawa. Ngayon ginagawa ang pagdiriwang ng kasal ng lalaki at babae na parehong Katoliko sa loob ng Santa Misa, dahil ito ay may kaugnayan sa iba pang mga sakramento na pinag-alala ang misteryo ng paskuwa ni Kristo. Dito natutupad ang Bagong Tipan na si Kristo ay nakikiusa sa Simbahan, ang kanyang nobya na ibinigay niya ang kanyang buhay. Kaya ang lalaki at babae na pinag-iisang dibdib ay ipinagkakaisa rin kay Kristo.

Masasabi natin na ang Kristiyanong pamamahay ay ang pook na kung saan ang mga anak ay tinatanggap ang unang pagpahayag ng pananampalataya. Kaya ang pamilyang pamamahay ay tinatawag ng "pantabang simbahan" komunidad ng biyaya at ng panalangin, paaralan ng pantang kabutihan at pagmamahalang kristiyano.

Kaya mga kababayan bigyan natin ng halaga ang mga sakramentong tinatanggap natin bilang handog sa atin ng Poong Maykapal.

典礼聖歌研修会のお知らせ

日時 2月12日(土) 16時~18時 13日(日) 10時20分~11時45分、13時~14時

場所 ザビエル教会 講師 深堀 純(きよし)氏(福岡サン・スルピス大神学院典礼聖歌指導者)

内容 主に聖週間の聖歌、対象 希望者はどなたでも。参加無料。12日は主に聖歌隊向け。

主催/ザビエル教会

へえ、日本の教会は今こうなんだ・・・
ザビエル

カトリック新聞は、日本のカトリック教会唯一の週刊全国紙です。全国、海外の購読者様のお手元へ毎週直送いたします。また、全国のサンパウロ・女子パウロ会書店でも販売しております。

1部本体価格 150円(税・送料別)
購読料金(前納、税・送料込)
半年 4740円・1年 9480円

見本紙贈呈いたします

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館5階 カトリック新聞社
TEL 03-5632-4432 FAX 03-5632-7030 Email kodoku@cwjpn.com